

瀧山寺の文化財について

瀧山寺

住職 山田 亮盛



失礼致します。私、昨年8月でございますが、当瀧山寺の住職を拝命を致しました。山田亮盛と申します。このような機会を与えていただいた事を大変感謝しております。と申しますのは、今からのお話というのは瀧山寺の宣伝するような事になってしまいます。何となくちょっとこの辺がくすぐったいところがあるわけではありますが、何かちょっと言い過ぎちゃったかなというような、今から言い過ぎちゃうのかなと思いつつ、ここの場に立っているわけです。まずもってこのように集まっていただけ事自体が大変驚きでありまして、本当にいいのかなというふうに思っております。私の話でこれで納得いただけるのか、満足いただけるのか、ちょっと心配な部分が沢山あります。とりわけ話術など自信はありません。そんなにお寺の事も勉強してわけじゃありません。今回サテライトオフィスの青山様のお話をいただいて、まあやつつけ刀で急遽勉強したというようなところがありますので、若干恥ずかしい部分もあるかなというふうに思っております。

ひとつ追い風かなというのは、この本でございます。ご覧になられた方もあるかと思いますが、昨年です。昨年1月に出された『芸術新潮』という雑誌なんですが、これがかなり宣伝効果があったっていうか、インパクトのあった記事で、ここにうちのお寺の仏像が紹介されている。というような事がありまして、今回、『聖観音様、梵天帝釈天様』のお話を中心に今日はお話を進めさせていただきたいなというふうに思います。この本が出たのはご存知の方もいると思いますが、ニューヨークで大日如来が、12億円で落札されたという。東京のある宗教団体がオーダーをしていたというような事が後で判ったわけではありますが、そこのご本尊になりました。この芸術新潮社もなかなか時を得てというか、上手ですよ。話題になったらすぐに本を出しちゃうって。それで運慶特集で出した。私のところはそれに乗っかっちゃったという、大変有り難いようなお話でありました。一昨年10月に「写真を撮らせて欲しい」という事で「どうぞ」と言ったらそれがかなり反響がありまして、今回もその辺りを中心に

話をしていきたいと思っております。

さっそく寺の歴史について話をしてみたいと思うわけでありまして。お話するにあたって最初に調べたのは、『岡崎市史』を見たわけでありまして。出てくるのはこの瀧山寺縁起というのがかなり中心になって、そこで論が進めてあったというので、まずひとつびっくりしたわけでありまして。中世があまり岡崎の歴史が解明されていない空白地帯であった。そこをこの瀧山寺の縁起が埋めたというようなお話は新行先生から伺った事がありますが、新行先生と申しますのは愛知教育大学の名誉教授であります。岡崎辺りの事については大変お詳しい先生であります。

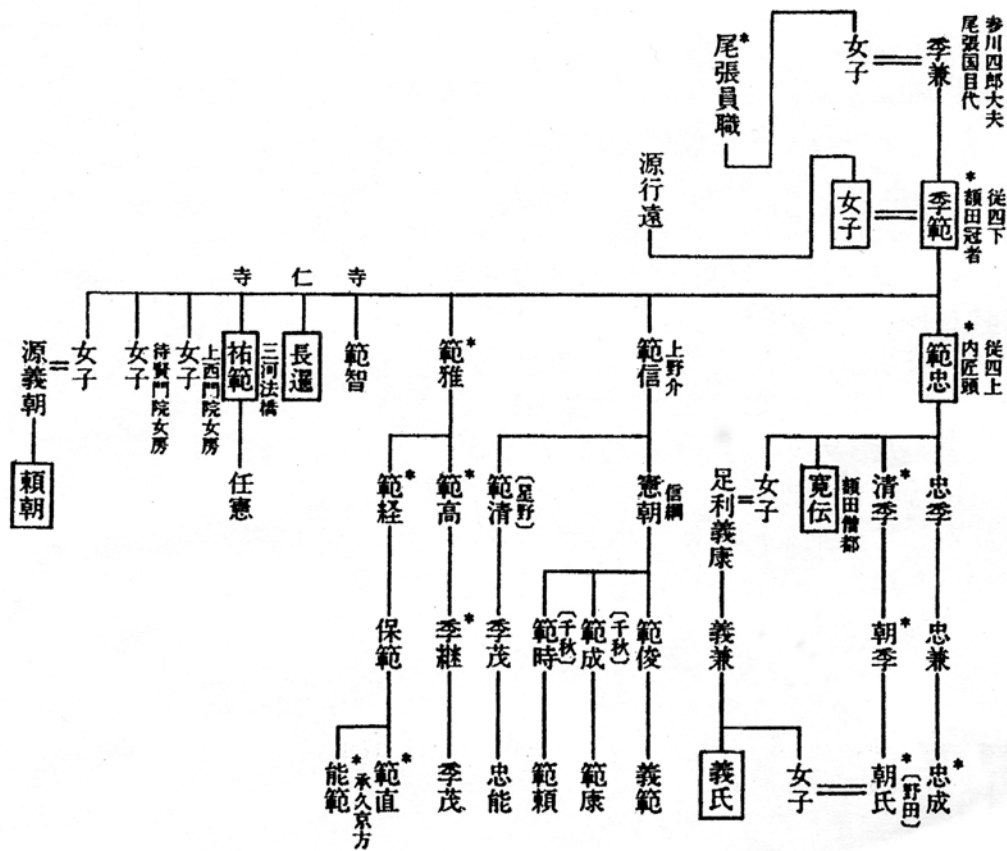
この縁起を見てみまして、これが1ページ目であります。ここ「役の行者小角」というふうにご書いてありますが、この方が瀧山寺の最初開いた方です。ここに漢文で書いてあるわけでありまして。書き下してまとめたものであります。こんなふうな事が書いてあるというふうにご読んでいただければと思います。行者が修行の為に溪流に入ったところ、瀧があり、その滝つばに大きな龍が金色の仏像を守護していた。行者はその仏像を袈裟に包んで引き上げたところ、金の薬師如来であった。行者は時の朝廷に報告したところ「鎮護国家の霊場を建てよ」と勅命が下り、自ら薬師如来をきざみ、その仏神に金色の薬師如来を納め、堂に安置した。というようなことがありまして、これが瀧山寺の始まりでございます。天武天皇の時代と申しますので、673年から686年ぐらいにかけて、まあ実際に物が残っているわけじゃありませんので、この辺りであろうという事でありまして。それ以降、この瀧山寺は荒廃を致しまして、ちょっと途絶えてくるわけですね。

その後これまた歴史上で出てくる、またこの縁起で出てくるのが、これお墓なんです。仏泉上人えいじん永救という方が出られてくるんですが。この方は加賀の生まれで比叡山で修行されて、三河の国に薬師信仰、仏教を広める為に下られたという方でございます。この地にまいられて荒廃した瀧山寺の後に霊場を建てて発展をさせるという事で、今も当山の宝物

殿の西側の高台のところに、お墓があります。このところに、開山仏泉上人墓というふうな記述がある。でもちょっと新しいので、後から付けたのかなっていう気もしておりますが。その方が瀧山寺を布教活動しながら広めて、瀧山寺を発展させてくださった。その時にですね、記述にあるのは瀧山寺本堂を建てて、その本堂を建てた棟木にこんな記述があるという事です。「沙門永救、檀那、物部朝臣、伴氏女」物部朝臣っていう、その物部氏という名前が出てくるんです。この私の記憶では、あんまり歴史得意じゃなかったんですけども、物部氏が出てくるのは6世紀後半に蘇我氏と仏教を取り入れるかどうかで対立し、蘇我馬子と戦って、中央を追われた。この方、中央追われて、その末裔は三河の方で地盤を築いていたのではないかなというふうに思うわけです。その方がスポンサーになっていただいて、350ぐらい寺坊があったと、この時代に。ご存知の方あるかと思いますが瀧山寺の三門。あそこが橋を渡ってすぐ入ったあの赤い門が、後でまた出しますが、そこから本堂までが約800メートルあります。門からそこまで800メートル。そこが全部敷地だと考えていただけたら、350あってもそんなに

オーバーじゃないなという気は致しますが、その中には三重塔であるとか鐘楼、それから惣持禅院、温室、法花堂、一切経堂。この温室というのは蒸し風呂のような物があったんだそうです。薬湯をたてるというような事で、その縁起には書かれておりました。それから一切経堂、それから常行堂、山王七社などあったわけでありまして。その仏泉上人を慕って多くの方がまた入山をするわけです。瀧山寺に弟子入りをしていくという事が行われてくるわけでありまして。

そのひとりの方で、この方がまた今からの話の中心になるわけでありまして、寛伝という方がおられるわけです。額田の僧都寛伝。資料の系図をご覧くださいとこの人の名前が出てくるわけでありまして、右端の1番上から3番目の方に範忠という方がいて、その子供のところに寛伝というのが3番目にありますね。その寛伝という方がこのご住職になるわけでありまして。この方というのが非常に良い家柄の方でありました。熱田の宮司家。熱田山の宮司家の出であるという事でありまして。本人は瀧山寺へこられたのですが、お父さん、お祖父さんは熱田の大宮司になられているという方でありまして。何でこ



熱田大宮司系図

- ・『尊卑分脈』『大宮司系譜』による
- ・*は大宮司就任者、□は『瀧山寺縁起』にみえる人物

こが大事であるかという、その系図の1番左端を見ていただくとそれがわかるわけでありませう。左端を見ると女子と書いてあって、その隣が源義朝。頼朝のお父さん。という事は頼朝と寛伝が従兄弟関係になっている。そこが1番この瀧山寺にとっては大切なところでありませう。要するにここから出てくる頼朝の事に繋がっていくわけでありませう。頼朝が寛伝を非常に可愛がってくれた。その事でひとつ事例としましては、下野国の日光山、満願寺というところの第19世のご住職になられる。その後、瀧山寺の方へこられたという事でありませう。その間何があったかちょっとわかりませうが、日光からこっちへくるのというのはあんまりいい事がなかったのかなという事も、勝手に想像しているわけでありませうが、それでこられてその直後に頼朝が亡くなる。そうすると寛伝にとってはバックアップを無くしてしまうというような事から大変悲しんで、生前の厚誼を思い、頼朝の菩提を弔う為に惣持禅院を建てて。それがこの記述でありませう。ここです。3行目、ここを見ていただくと、惣持禅院の事、惣というのは物という字に心を書いて、惣持禅院の事。まあ漢文の苦手な方もかなり漢字を拾っていくとわかりませう。

此の堂は鎌倉右大将家の奉為なり。上へ戻るんですね。その後の記述、この辺りです。彼の御鬚の落と齒を以て仏身に納め、即ち彼の等身を以て仏の寸法と為て造り奉るなり。というふうにして書いてあるんですね、これ。ここら辺から造り奉るなり。簡単に言うと、頼朝の齒と髪を仏様の中に納めて、仏様の寸法を頼朝と同じにしたというふうな事を、もちろん霊を弔う為にやったというふうにして書いてあります。その後、これがまた大事なんです、この辺りからです。本尊は正観音、脇士は梵天・帝釈なり。その次が仏師八条の法印運慶・同子息湛慶。ずっときてこの消してある部分には、式部僧都寛伝造立すというふうにして、なぜか消してあるんですけれ

ども。もうひとつの本にはそういうふうにして書いてあります。何となく字を見ると、この字なんか式という字に見えない事はないなと思われませう。そんな記述がありませう、要するに運慶が造った仏像だというふうなところが瀧山寺側からいうとそれが根拠になるわけですね。ただ悲しい事にそれを証明する手立てが無かったという事でありませう。

これが聖観音でございます。175センチくらいです。上から下まで。かなり大きな像であります。それからこれが梵天ですが、半分しかありません。全体が見たい方はどうぞ瀧山寺へいらしてございませう。本当はそういう意味じゃなくて、本当は良い写真が無くて、取り込んだ写真がこれが1番良い写真だったので、なかなか良い顔をして見えますよ。帝釈天です。先程の聖観音の聖観音に戻るわけでありませうが、この聖観音。残念な事に色が付けてあるというのが、大変鮮やかな彩色をしてあるわけですが、これは私が聞いておりますのは、元禄の時代に色を付けてしまつた。これが仏像にとっては非常にマイナスになるわけですね。当時のままというのが1番良いんだというふうにして聞いております。昭和53年だつたと思つて、文化庁の調査が入りませう、この仏像にX線をかけた。そうしたら出たんです。齒と髪が毛が入っている仏像があるという事で、瀧山寺は常にずっとそういうふうにはお伝えしてきたんですが、本当かどうかわかりませう。お寺の事は大風呂敷だぞというような事もありませう、取り上げてもらえなくて、それがこのレントゲンをかけましたら、ここです。齒と髪はわからないけれども、何かあるぞという事ですね。寄せ木でこのかすがいで留めてあるというところがもちろんお判りになると思つて、ここに何かある。これは正面の写真ですが、横から見ますとね、こういうふうにして木を渡し掛けて、ここに絡めてある。そんな写真が見つかりませう、まあこれは間違いなであろう。その寛伝が頼朝の霊を弔う為に造った仏像である。これにわかに脚光を浴びたのが昭和56年でありませう。国の重要文化財に指定をされたという事でありませう。これ今の宝物殿にこんな形で展示はしてございませう、また宜しかったらご覧いただければというふうにして思つて。

先程最初に申し上げました芸術新潮が出まして、昨年でありませう、12月の終わりぐらゐから1月なんですけれども、大体あの瀧山寺の1月とか12月というのは電話かかってくるのは決まつてるんですね。鬼まつりいつですか。節分いつですか。そんな電話ばかりなんです。あのこういうふうにしてやりますよ。ちなみに今年は節分は1月31日。それ



帝釈天

聖観音

梵天

から鬼まつりが2月20日でございますので、宜しければどうぞ。そういう問い合わせが多いんですが、昨年は違いましたね。本に出ている仏像があるのはお宅ですかとかね。いつ行ったら見せてもらえますとか、休みはありませんとか。そんな電話が沢山はいりまして、これは凄いな、本の力は凄いなというような事に、驚きました。もう1点この本、大変小さくて恐縮なんです、この本なんです31点仏像があるところの場所が示してある地図があったんです。私はこれが1番驚きました。なぜかという、関東に5つお寺があってそこに仏像がある。関西、近畿圏に4つ。まあ関東は頼朝がいたところだからとか、鎌倉時代とかいうぐらいだからこちらが中心である。近畿圏はそれまでの中心であったというところでなんです、1個だけここにポツンとあるところがこの瀧山寺だったんです。これが1番驚きましたね。如何に不勉強であったかという、自分を恥じているわけでありまして、そういう仏像であったという事がわかりまして、大変驚きました。これが最初の中心である聖観音、梵天・帝釈天でございます。この本にちょっと付いてまして、後ろ姿が美しいというふうでしたので、ちょっと私もいたずらして、大体仏像を後ろから見るといふ不屈な事はありません。正面から見てお参りするのが本当でありまして、最近こられた方は必ず後ろに回って、いやあいいですねとおっしゃって帰られます。良い仏像は後ろから見ても美しい、こういう事でありましてちょっと撮ってみました。

あとじゃあ他には仏像はないのか、文化財はないのかというといろんな仏像がありまして。瀧山寺本堂に行っていたら、本堂をがらっと開けるとこんなふうに見えるんですね。ご本尊がありまして、その隣が、日光菩薩、十二神将も一部写っております。この光背だけ写っているのが不動明王であります。ご本尊であります、ちょっと写真がぼけておりました申し訳ありませんが、見てもうお気づきになる方もあろうかと思いますが、金属製の物で出来ていて、光背が木製なんです。これどういう事かというふたつの仏像をくっつけたんだと思います。でもこの仏像も鎌倉時代のものだという事を聞いておりますが、調査に入られた先生が、これも良いものだよというような事はおっしゃっていましたが、悲しいかなふたつをくっつけてひとつにしたというような、うちの仏像はそういうのが他にもありまして、そんな事が行われているようで。これにつきましては、お前立ちでございます、ご本尊は秘仏になっております。この秘仏は50年に1回ご開帳をするという事でありまして、いつも参拝者の

方にそういうふうにご説明を申し上げますと、今度いつですかと必ず聞かれるんですね。そうすると私いつも平成元年に開帳しましたって言うんです。そうすると明らかに顔が落胆の色が濃くて。はい、そうなんです。あまり悲しそうな顔をされますんで、私が住職の時代もとびますよと言ったら、そうですねって言って私も仲間だと。あと30年ありますからね。今、58歳です。頑張ればいけるかなと思っておりますが、ちょっと苦しいかな。

ご開帳の時の話を少しさせていただきたいと思うんですが、ご開帳の時に、前日住職がお前上に行って見てこい。実は住職も見た事が無かった。うちの住職、住職と言っているんですが父の事でありまして、父がきたのが昭和25年に瀧山寺にきているんですね。それ以前昭和13年にご開帳したという記述があるんですが、それ以降も戦争もあり、お寺がだいぶ乱れた時代だったようでありまして。それ以降は必死になって守ってまいったわけでありまして、ただご本尊だけは見た事がない。見ずしてお参りをしていたわけでありまして、それで見てこいという事で本堂に行きました。ひとりじゃ心配ですので、他のご住職二人連れて3人でお参りに行ったわけでありまして。開けようと思って開けたら、本当に大きな1メートル50センチぐらいある座像がどんと座っていたんですね。ちょっと驚かしてね。本当に息を呑むってああいう事だろうな。それともうひとつは、私はその戸を開けた時に、えらいお寺に生まれちゃったなという、その責任の重さというか歴史の重さっていうか、そういったものを本当に感じました。それを平成元年に見られた方が、わしはもういっぺん死ぬまでにあのご本尊が拝みたいっておっしゃる方が、年配の方でお見えになるんですね。もう1回見てわしは死んでいきたい。ああそうですか。でもあと30年ですよといっても、それはもたないから。世の中は面白くよく出来ておりました。天台宗の宗務に詳しい方にご相談をしました。こういうお声があるんですけども相談したら、そういう時はね、便利な考え方あるんですね。ご開帳じゃなくて半開帳にすればいいって。25年ぐらいのところまで半分。本来は例えば2週間やるところを半開帳だから半分、または3分の1とか。ご開帳の期間を短くしてやるのもひとつあるよというようなお話をいただきましたので、そうするとその人のお気持ちも叶える事も出来るなあとというような事を思って、今密かに秘策を練っております。その節にはまた宣伝等を致しますので、またご来山をいただければ有り難いというふうに思います。宣伝ばかりですね。

それからこれがご本尊から西側。入って左側の

ところがございます。こういう並びになっております。毘沙門天、これが毘沙門天であります。それから後ろに十二神将の6体があって、これが月光菩薩。この毘沙門天であります、お手元の資料のところに入れさせていただきましたが、この写真がこれです。是非今日の記念にという事で付けさせていただきました。ただこれ18年だったと思いますが、名古屋市博物館で比叡山と東海の至宝展に出品した時に写真を撮っていただいてカードにさせていただきましたので、是非またお持ちいただければというふうに思っております。

続いて東側ですね、日光菩薩、十二神将、それから先程光背だけでしたけれども不動明王でございます。これいずれも市の文化財に指定をされているという事です。この十二神将についてですが、先程の縁起には運慶が造ったというふうに書いてあったんです。これ本当だったら大変な事なんです。愛知県史編纂の時に、調査に入られた奈良教育大学の山岸先生という方がお見えになって、ちょうどクリスマスの日だったと思いますが、3日間きでずっと朝から晩まで埃にまみれて調査をしてくださったんですけれども、まあ鎌倉時代は間違いないけれども運慶ではない。顔の造りとかこの襷のところが巧くないと。それだけの細工がしてないという事で、時代のはっきりしているものとしては何か関東の方によく似た仏像があるから、それが年代が鎌倉の後期のものだという事でしたので、恐らくその時代のものであろうという事でありました。あとこれが本堂にある仏像でございます。ですから本堂としては正面にお前立ちがあって、その中にご本尊があって、両脇に日光菩薩、月光菩薩、その後ろに十二神将が守っている。6体ずつで守っているという事でございます。

あと宝物殿に先程の聖観音、梵天・帝釈天がありますが、他にもこれ形しか見えません。きていただいてもこのぐらいしか見えません。十一面観音は平安末期の菩薩像で、でもまあ煤けて大変黒くなっちゃっております、これは観音堂というのが近くにありまして、そこのご本尊であります。かなり建物自体が老朽化しております、いつ倒れてもという事がありまして、宝物殿で安置をさせていただいております。

これでありまして、これが天台大師といえます。1番期待をしているというか、これから出世するのではないかなという。今これ市の文化財、二年前になったところなんです、それまでは何もなかったんですけれども。大変優しい顔をしておられますが、特にこの天台宗を開いた中国のお坊さん

で智魏という方なんです、この座像が残っているというのは全国的に大変珍しい。珍しいっていう言い方は、多分ないと思います。天台宗の開宗1,200年、806年に最澄が比叡山に天台宗を開いてから、ちょうど2006年は1,200年。その1,200年祭で大きな企画展があった時に、この天台宗を語るには、ここから出てるという事で、この方が図録の1番に描いてあって、展示されているの、1番最初に展示されていたという事もある、恐らくこれは重要文化財になるんじゃないかなと思っています。密かに私は期待をしているわけでありまして。絵画で、天台大師の絵画が重要文化財というのは何点かあるんです。座像になってるといっては、恐らくこれはきっと今よく見ておいてください。または瀧山寺の宝物殿に見えた方には必ず説明しております。これいい仏像ですから是非見ていってくださいというような事で、私どもはこの天台大師はお祀りをする。12月に天台会、「会」と書いて「え」と読むんですが、天台会を催させていただいています。天台大師の偉業を褒め称えるというような会で、まあ地元の方がお参りするわけですが、ひとつ面白いのは、その時に食べるのが、食事を出すわけですが、豆粥を出すという。そういう習わしだそうにして、小豆をただお粥にするっていうんじゃないで、まあそれじゃあ食べにくいからという事で、ご飯にして、豆ご飯にしてお出ししているというような事も行っております。

それからあと狛犬です。これ日吉神社、本堂の裏にある日吉神社を守っておった木彫であります。こちらが阿形、これが吽形であります。まあ口元を見ていただいて、この上顎のところは欠けちゃってるんですね。だから開きすぎなぐらい開いているんです、口が。阿形はこのたてがみのところがカーブしてる。こちらは真っ直ぐ、まあその違いがあるっていうような事で。全体を見ますと非常にスマートなきりっとした狛犬になっております。非常に古い。もうひとつはここに角があるという。ここに、こっただけですね。吽形には角があるというような仏像があります。

それからこの菩薩面であります、全部で6つあります。これも県の文化財に指定されておりますが、私自身不勉強でこれ何だろうなと思っていました。最近、名古屋市の古川美術館というのが池下にあるんですが、そこへ出す企画展があって、そこへ出品をしたわけです。その時に教えていただいたんですが、これにつきましては、阿弥陀如来来迎会というのがこの当時、鎌倉時代に流行しておったそうです。阿弥陀如来来迎会。まあ臨終を迎えて亡くなる人の元に阿弥陀如来が降りてきて、それで浄土へ導いて

いくというような形の、まあ今流でいう劇をやっておった。その時に被ったもの。これ見ていただくと後ろも付いてまして、オートバイのフルフェイスのヘルメットのような格好だと思っていただければ。これを顔につけて、下にまばゆい衣装を着けて仏像としてそれに参加をしていた。12着作ったというのが縁起に書かれております。奈良の当麻寺というところが、今も行っておられるという事で、ちょっと写真だけしか私も見た事ありませんが、キラキラの格好で、これを身に着けられた方が、静々と行進をされて、往生者、亡くなった方を連れて行くというような事を行っておられるそうです。

これは、アップにしてありますが、これ磬です。磬っていうのは鳴らすものでありますが、これにつきましてはどこの宗派の方もいるだろうと思いますが、天台宗でいうと導師が上がる礼盤とありますが、そこでお経を唱えるわけですが、その右脇にこれが置いてあるんですね。ぶら下げてあるというか。それで鳴らすんですが、これは多くの場合通信手段で使っているわけです。どういう事かといいますと、鳴らしたらこうするよ。鳴らしたらこうするよ。そういう決まりになっているんです。最初もちろん今日はこういうお経で唱えますよというふうな事は打ち合わせをするわけですが、その時にお導師が上がってさあ始めるよじゃなくて、そういう状態が出来たら2つ鳴らす。そうすると大体始まりますから。これOKだよ、みんないいかなという事で。それから後は同じお経を繰り返していった場合に、もうそろそろだな、これでいいかなって、これは全て判断はお導師がされるわけですので、もうこれで最後だなと思ったら、念仏でもこれでもう最後にしようと思った時に鳴らす。そうすると終わるというために使う磬であります。これがあの室町時代に出来たもので、ここに彫り物で孔雀が羽を広げたもので孔雀文磬というふうに名前が付けられております。

また、こういったものもあります。これまだ現役で使っております錫杖です。こうやって見ちゃうと



瀧山寺本堂

大きさがわかりませんが、この小さい方が鎌倉時代に作られたものだそうです。これ92センチあります。それから大きい方が室町時代に108.5センチ。これを持って鬼まつりの時に先頭を切ってこれを振って出ていくんです。大きい方は大人がふたりで振ります。でも5分振ると息が上がっちゃうぐらい重いそうです、これは。それから小さい方はひとりで振りますが、そういった時に使う錫杖がまあ工芸品として残っているんでしょう。仏像関係はこれぐらいであります。

あとあるものとしては、この本堂が国の重要文化財になっております。これ今屋根を葺き変えて、17年に葺き変えたところです。カラスが自分の巣を造るのにこの屋根の桧の皮を抜いてってしまって、カラスが巣を造ってしまった。穴が空いちゃったんですね。雨漏りがするというような事で、早く直らないかなと。うまい具合に文化庁からの補助もいただいて修理が出来ました。今、本当に綺麗です。それから非常にこの屋根の重みというか重厚感が私は好きで格好良いですね。この桧の皮を集めるのが非常に大変です。まあ私が集めるわけじゃありませんのでいいんですけども。

これ本当に慌てて撮ったものですから、実は舞台裏話すとちょっと自分の用意した原稿が足りなくて、慌てて写真入れてもうちょっと増やそうという事で撮りに行ったんです。昨日、一昨日撮りに行ってきました。慌ててその天気もあまりよくなくて。本当に見せたいのは、この柱の上のかえるまた臺股っていうのをお見せしたかったんですが、ここのところに臺の足のように二股に分かれた木がやってあるんですけども、そこのところ。もうこういうのはすぐ変えます。これは柱の横のところにある肘木。この彫りが鎌倉時代の彫りであろうという事で、この辺りが建物、屋根とこの辺りが特色になっております。屋根ですが檜皮葺と言いまして、桧の皮を集めてそれを竹釘で止めてあるという、そういう造り方がしてあります。こんだけの層の厚さにしてあるんですからね、なかなか沢山要りますが、ただ材料が沢山取れないという事で、ここ見ていただくと、ここの部分、これ銅板が貼ってあるんですね。下に染みていかないようにしてあるという。でも上の方はやってなくて、この入り口の辺は、この厚い部分だけは材料が傷まないように、また使えるようになっていうような事で、上の方はやってないから雨漏りがしちゃうんですね、カラスに取られて、という事があります。

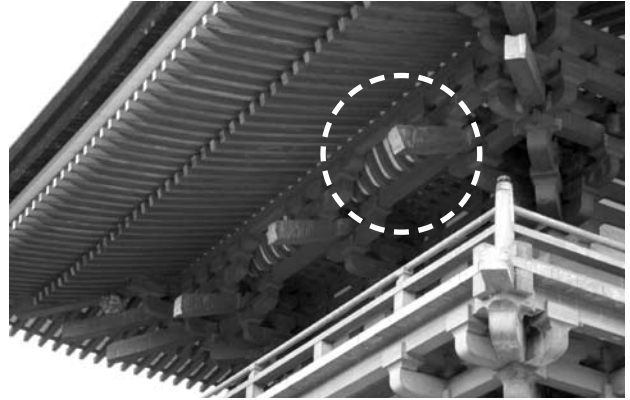
それから仁王門でございます。最初お話しした800メートルぐらい下がったところにあります。ただ



瀧山寺仁王門

これ裏から写しているんですね。東から写しているんですけども西側が表ですので、向こうからお見えになっている。裏から撮ったのはなぜかという、それなりに理由がありまして、後ろに見ただくとこの楠くすのきが大きくて、反対からだ建物被っちゃって撮れないんですよ。上手く撮れないもんですから、まあいいかという事でこちらから撮りました。この仁王門、これも国の重要文化財でございます。ここの白いところに仁王門というぐらいですから、ここに仁王像が入っております。本物と思ったんですけども、こんなふうには写真が撮れないですね。ここ柵がしてありまして、外からですと金網がしてあって、まあどこもそうなんでしょうけれども、入れるようになっておりまして、これも写真から撮っておりますので、このストロボの光った辺りが見えてしまって、もう本当に申し訳ありませんが、この辺りの阿形、吽形の顔。ただこれは彫りが非常に甘いというような事を言われておりまして、寺の記録では運慶だと言っております。そういう時が時々あるんですね。

屋根にこだわって申し訳ないんですが、これは柿葺きこけらぶきという葺き方がしてあるんですね。大分傷んでるんですね。これ、この前の台風で吹き飛ばされました。ちょうど風が東から吹いたんですね。だから東側のところがめくれちゃった。大分悪くなっているんですけど、もうそろそろ修理しなきゃねなんていう話を市の文化財課の方々としていたんですが、そうしたら今度は早くしなきゃいけないような状況になって、この辺もう随分ささくれたみたいな状態になっております。これ柿葺きと言います。柿葺きというのは、先程の皮じゃなくて、薄い板を貼っていくという。私も調べまして、「こけら」という文字はどう書くかという「柿」というように書きます。「かき」という文字は「柿」と書きます。大変よく似ておりまして、読み違えてしまうことがあります。辞書には、どういう事かという



逆さ垂木

と、柿こけらは一画少ない。柿はこういうふうにしという字をこっちに書きますが、ご存知だろうと思いますが、申し訳ありません、偉そうな事言いまして、こちらは点を打たないんです。一、二、三、縦を通す。これが柿こけらという字だそうです。まあ常用漢字ではありませんのでいいと思うんですけども。そんな事を最近私も知りました。漢字で木気良こけらというふうを書く書き方もありますし、一文字で柿こけらのような字で書くというのがあります。

この仁王門につきましてはちょっと興味深い話もあります。この造られた方が飛騨権守藤原光延ひだのこんのかみふじわらみつねという方で、これがその塚でございます。この方が出来た折に、この逆さ垂木の伝説があります。飛騨権守藤原光延が造立をしましたが、この工事にあたり、垂木が造り違えてしまった。それを下から見た老婆が「名人でも間違える事があるのか」というふうな事を申して、それを恥じてのみをくわえて亡くなった。それで飛び降りたところ、落ちたところに椿の芽が生えてきたというような話がありまして、それが逆さ垂木の伝説というのであります。この逆さ垂木が見てわかりますでしょうか。垂木というのはこの黄色い部分であります。黄色い部分の木であります。見ていただきますと、明らかにこの垂木が他と比べていただくと違ってませんか。切り口が、傾きが。これちょっと上を向いてる。これ下を向いてる。明らかにこう反対に付けてある。そこから逆さ垂木というんですけども、こういうのが、仁王門の南側にあります。川沿いの方に行ってください、青木川を背にして見上げていただくと3本真ん中にあります。その1番東側だと思っていただければ。実物見ていただく。この位置から見るのが1番わかりやすいです。この東側から見上げていただくと、明らかにこの面がこれだけ違っているというのがわかるのではないかなと思います。これが逆さ垂木であります。ただこれ名人がそう簡単に間違えるわけじゃありませんので、完璧な物を造ってしま

うとあとは欠けるとしてまあ一部不完全にしておいたっていう、昔の名工の考え方があってこういうふうにしたんだろうと言われておりますが、もっとわからんところでやればいいのにねってような事は、俗っぽい人間は思いますけれども。まあそういう鎌倉時代から室町にかけてのこれが建物でございます。

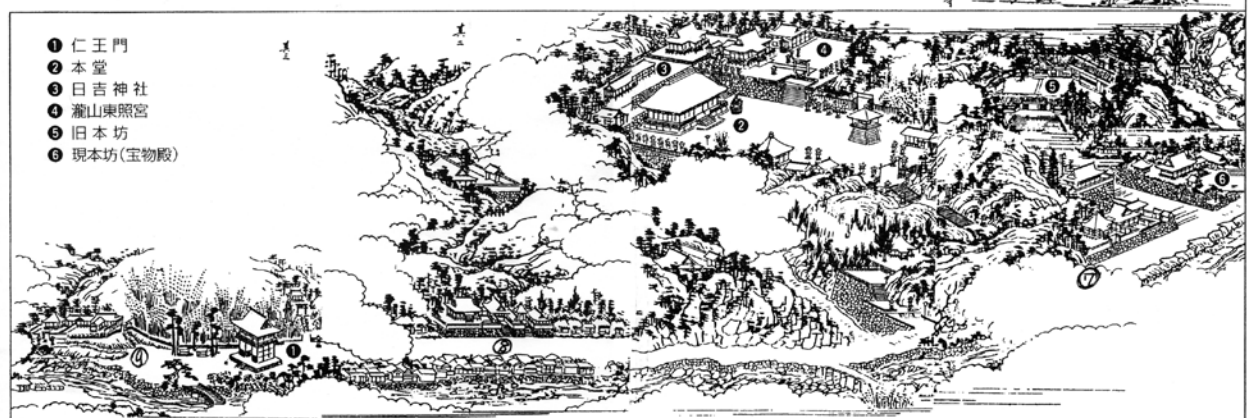
それ以降瀧山寺は衰退をしていくわけです。世の中が乱れてくる。戦国時代に入っていくなんていう、戦乱というような影響も受けまして、あと室町幕府が禅宗の方に傾倒していく。天台宗というのがやっぱり外れてくるんですね。悲しいかな、こんな地方の一寺院、そんなところに禄高があるわけではない。鎌倉時代に412石をいただいておったそうです。だから収入はあったという事ですね。それ以降それが途絶えてきた。そういう一寺院を庇護するという事がなくなってきた為に、これ以降瀧山寺は非常に荒廃をしていく。どんどんお寺がなくなっていくわけがあります。350もの寺をととも維持できないという事があります。寺の歴史も途絶えてるわけですね。住職の欄を見ますと始まっているのは江戸時代からの記録は残っているんです。鎌倉でしたら住職が代々変わってきたら、もう何十代というふうな数字になってもおかしくないと思うんですけども、調べましたら私が25世という事になりますから、江戸時代になりまして、新しく始めたんだろうと思います。

これ江戸幕府になりまして瀧山寺はまた復活するんですね。また412石をいただけるという事になりまして、復活をしていくという事があります。特にその比叡山の天海僧正の弟子であった亮盛という、同じ名前なんですけど、亮盛という方が出られて、その方が大変家光の信頼を得て、東叡山寛永寺に青龍

院というお寺を造って、そこのご住職と瀧山寺の住職を兼務するという形で許可をされる。そこからまた復活をするというのがそこにあります。そういう事で言うと亮盛という名前は瀧山寺では一番良い名前なんですね。それを貰っちゃったもんですから、ちょっと頑張らなきゃいかんぞという。それもありまして今日ここに立ってるわけです、宣伝しながら。ただあの亮盛という漢字でありますけど、盛ってという字が盛岡の盛なんですけれども、新行先生の話ですと、江戸時代の方は亮盛(りょうじょう)と読まれてですね、この方の事を亮盛(りょうじょう)とおっしゃってました。その読み方が正しいのかもしれませんが、戸籍上は私は亮盛(りょうせい)と言っておりますので、私は敢えて亮盛(りょうせい)でいきます。

その家光の時代に、隣の東照宮、瀧山東照宮、これを造れと。久能山に造って、日光に造って、その後岡崎にないじゃないかという事で岡崎のどこへ造ろうという事で、ここがうまい具合に白羽の矢がたった。理由としましては、この地が岡崎城から見て北東にあたる。瀧山寺というのはちょうど北東になるんですね。それが鬼門封じになる。ここに東照宮を建てる事によって、それが一番有力ではないかな。ただあの色んなところが東照宮造りたい、造りたいという事で、まあ今でいう誘致合戦があったんだろう。それでたまたまここへ。何故かという、東照宮が出来ると加増されちゃうんですね。東照宮が出来た事によって、瀧山寺は200石加増になりました。ですから612石になっちゃったんですね。単純に言うと1石でひとりを雇えて1年分食わせるだけのものがあるという事ですね。600人雇ってもいいという。お寺に600人も必要ありませんから優雅な暮らしをしていたんだろうと思います。江戸時代

瀧山寺古絵図



ですよ。ちょうど反対側から見た図であります。本殿を中心にしてみました。撮ってみました、あの何が言いたいかという、ここの灯籠群です。灯籠がいっぱいあるんですね。この反対側にもありますし、それから境内至るところに灯籠があるわけですが、これが当時の大名から寄進をされている。家光が灯籠を寄進しろという事で命を下して造らせたというふうに聞いておりますが、凄い強大な力があつたなという。こういう灯籠がいっぱいあります。見ていただくとまだ何となく読めます。40年ぐらいの時に悪い人がいて、これを拓本にするというんで、赤い物で付けちゃいましたので、これ全然取れなくて、まあ赤くなっちゃってるんですけども。そういう灯籠もごさいます。

あとお付けした資料の絵地図であります、絵地図というか絵図であります、石川貫河堂という方が描かれた。あのいい加減に見えますが、かなり正確だなというふうに見れるんですね。ですから載せたんです。まあ江戸時代に描かれたという事ですが、左の方から見ますとですね、1番が仁王門であります。この絵自体もかなり正確な形をしております。手前に仁王橋があって、そこをずっと登っていきますと8番というところが、これは弘願寺さんで真宗のお寺なんです。これは弘願寺さんといいます。そこをずっと過ぎて橋を越えた辺りから表坂からこう上がっていく。この上がり方なんか本当に今でもこういう上がり方をしていくんですね。真っ直ぐ階段を上がって、右に曲がってそこにひとつお寺があって、今の駐車場のところですね。西側の駐車場のところにお寺があつたんだという。そこはまた階段を上がって今度は左に曲がって正面階段出ていくと本堂があるというような形であります。本堂があってその後ろに日吉神社があって、その東に東照宮があつてという事があります。注目すべきはその地図でいくとその右側のところに旧本坊と書いてあります。旧本坊というのは今の中学校の辺りです。常磐中学校の辺りにあつた。それからその下にある今の本坊であります。それから宝物殿のあるところが6番ですかね。それから先程十一面観音があつたのが7番のところ。そこにあつたというふうに記憶しています。それからずっと外れ9番のところがこれが萬松寺さんで禅宗のお寺であります。入り口入って仁王門から下がっていったところにあるわけです。

東照宮もう少し説明しなければいけませんでした。あの葵の御紋がいっぱいあるからちょっと写真を撮ってみました。これが目に入らぬかっていう。これでもか、これでもかってあります。それから風

雨にあたっちゃって剥げてるところもありますが、ここの辺りは本当に綺麗ですね。という東照宮であります。

これが中学校のところにあつたという青龍院、旧本坊であります。こんな形をしていたというふうに言われております。これは、これもまた正確なものではありません。この青龍院を知っている年寄りの方が話をされて、こんな形をしていた、こんな形をしていたという自分の記憶を語られてそれを絵にしたもの。ですから全然違ってないけども、それじゃあ正しいかという、うーんっていうところもあります。でもかなり立派な本坊であつた青龍院というお寺がこういう形でありました。その他にあの常心院とか観量院、浄蓮院、容巖院、玉泉院とかというお寺がこの近くに、本坊の周りにあつたと言われております。今はもう荒れ果ててしまつて、今はもう竹藪になっているところを見ますと石垣が組んである跡が随所にあります。恐らくそれはもうかつてのお寺の跡であろうというふうに想像して難くないというふうに思っています。

それからこれ知られてないんですけども、江戸時代の住職の代々の住職のお墓がここにあります。場所は少し下がった弘願寺さんの裏手にある山の高台にあるわけですが、ひとり人間でも立てておくこの大きさがわかるんですが、この花筒に注目していただければ、これ孟宗竹を切つたものですので、この一節が大体30センチだと思つてください。ですからこれの高さだけで80センチ、90センチあるんです。そこから高さを想像していただく。とまた亮盛さんが出てくるわけですが、この正面のお墓は亮盛さんのお墓なんです。ここで80、90センチだと思つていただければ。立つて私もこう手を伸ばしてみたんですけども届きません。こちらのお墓でこの辺まで手がいったな。だから2メートル以上のお墓がずらっと並んでるんです。かつての勢いというか、612石というのはこういうところも凄いなというのを、私も感じましたね。大きな墓、まあこう見ていただいたように荒れ果てておりますが、人手がなくて掃除が出来ずに、でもここだけ掃除しとけばよかったですね。

あとは明治以降につきましては、この612石が明治以降になつてなくなつてしまう。もう当時のご住職方はきっとショックだったでしょうね。それ以降はもう切り売りというような事で、お寺の土地をどんどん売って生活をしていくというような事が行われて、それ以降明治以降については目を覆いたくなるような状況になつたという。まあその時にですね、本当に私も思うんですけども、塾か何か

やっておいでくれたらね。瀧山寺塾。慶應義塾に向こうを張って瀧山寺塾というのが出来たかもしれませんね。当時ね、学識が高いというのはお坊さんですから、そういった方がそちらに目を向いていったらなと思ったんですけれども、612石の生活ですからきっとそこには行かなかったんでしょうね。これからの時代は子どもたちだと言ってくれたらきっと良かったんだろうと思うんですが、こんなふうにならずに。

あと何で鬼まつりが出てきたかという、文化財という事でくりしましたので、今までは有形文化財なんです。これは無形文化財、形がない文化財。これは県の無形文化財の第1号なんです。昭和29年3月12日に指定をされた。だから文化財、無形文化財を指定するというので最初に瀧山寺の鬼まつりが指定をされたということです。ちょっと誇ってもいいかなというように思っております。ご存知の方多いと思いますけれども、本堂で松明を持ち込んでこういうふうにするわけですが、大体参加者が200名ぐらい。表で出る人じゃなくて、裏方で支える人とか、そういった方を集めると200名ぐらい。もう既に始まっております、先日警察に行き、行きますから宜しくお願いします。消防へ行くってお願いいたしますというところから始まるわけですが、鬼まつりの準備が進んでおります。これが終わると暖かくなるというのが、滝町では囁かれる。鬼まつりの日になると鬼まつりの日だと寒いねという言葉、で終わったらそんなに変わってないですけども暖かくなったなという。でも今年は2月20日ですので、かなりそういう思いは強いかなというふうな事を思います。

修正会と申します、修正会というのはお寺の正月の行事であります。正月に修行に入ってお参りをし、瀧山寺の場合ですと1週間修行をしてくださいよと冠面者をお願いをします。私どもも冠面者ほどではありませんが修行をするわけですが、まあその修行の大きなものとしましては、精進潔斎をして祭りに臨む。まあ具体的に言うと動物の肉は食ってはいけません。家族のものとは別の火を使えと。それから寝食は共にするな。女性の方が沢山いる前と言うのははばかられますがこの時代は、女性は不浄のものとされておまして、沢山お見えになって恐縮です。ただあのちょっとだけ追い風になるのは、相撲がそうですね。相撲の土俵の上を女性を上げちゃいけないと言いますよね。そのあたりの延長線にあると思っただけならばと思います。その修行をされて、1週間して、その終わった日にお祭りを。ですから主役の鬼がお祭りが上手くいく、い

かないというの鬼の修行にかかっているというような言い方をする人もいますね。今年の祭りは良かった、鬼の修行が良かったんだねとか、雨降ろうものなら何やっていたんだ、お前というような。幸いうちの薬師如来様は天気強く、雨は降らないですね。まあ降ってないわけじゃないですよ。大雪が降った事もあります。どうする、こんな雪が降って。でもやります。異常乾燥注意報が出てやります。強風注意報が出て、やります。消防の方が今日はどうですかね、止めませんかって言って。そんなときでもやりますって言うと、そうですねって帰っていかれますが、こういう火を使いますので大変心配をさせていただいてます。

去年見たんですけれども、たまたま鬼まつりが終わって、床がその時連絡が悪くて中々電気が点かなかったんです。お祭り始めると電気消してしましますので、真っ暗の中で松明の火だけなんです。終わって、床が火が付くのが遅かったので見ましたら真っ赤になっているんですよ。その松明から落ちた火がずっとこう層になって、ああこれは大変だなと思いました。まあ終わるとすぐに電気が点くとすぐに消防の方がきてすぐに水を打って消してしましますので、火が出る事は心配はないわけであります。

あとお祭りを守る為ですね、滝町が全面的に協力をしていただいている。滝町の規約に書いてあるんですね。滝町町民は鬼まつり保存会に所属しているというような事が、もう町の規約に入っています。ですから滝町の方は全員出ていいんだけど200人きていただければいいから、全員はきません。だから毎年代わって参加者が手伝っていただけるわけですが、そういうふうにもなっております。そういう思いも込めまして、感謝の気持ちを込めて、ここに鬼が餅を持ってると言うんです。ここお餅があると思いますが、このお餅全戸に配るんです。お餅が鬼まつりになると6個出来るんです。鬼のそれぞれのお飾りが2つずつありますから6個あって、1個ずつは鬼が持っていきます。それからもうひとつ主役である12人衆が1個持っていきます。あと2つ余ります。2つを360軒ありますので分けます。お祭りのお下がりだという事で、参加をしていただいた、直接今年は参加出来ないけれども、参加をしていただくお下がりだという事で、このぐらいですけどもね。次の日に組長さんが切って、お前のところ何軒だ、はいそうかと言って全部配って、それ全部1軒1軒配っていただく。かえって貰った方が困るかもしれませんね。

それからあと後継者を育てていきたいという事を強く思っております、お祭りの参加者が昔はお祖

父さんで上手な方がいて、小学生ぐらいの子を連れて、今年は鬼まつりに出させてやるなって連れて歩いてくださったそうです。上手に連れて行ってくださった。だから鬼まつりに参加すると俺はちょっと偉いぞという。子ども同士の中でちょっと箔が付くんですね。郡上の川へ飛び込むと一人前になるというような、あれと同じような事ですね。そういうふうで今そんな事出来ませんから、特別に小さい松明を造って、本当はすぐに始まるんだけど最初に子どもだけ出す。大人になったら参加してくださいよという願いを込めて少しでもお祭りを長く長く、伝統のお祭りを続けていきたいというふうに思って、進めております。

これがお祭りで使う面であります。角があるのが祖父面、お祖父さん。角がないのがお祖母さん、反対のような気もしますが。孫面。お気づきになる方もあるかと思いますが、孫は目が開いてるんです。ここ、赤いのが見えますでしょう。お祖父さん、お祖母さんは目はあるけれども開いてません。ですから面を付けて孫は動けますけれども、お祖父さん、お祖母さん面を付けている人は動けないんです。ですから必ずお祭りまたこれ見ていただければわかると思いますが、隣に必ず両脇に屈強な若者が付いてるんです。ここにさらしを巻いて、そのさらしをギュッと持って誘導するんですね。だから鬼まつり大変ですねと言いますが、全然って言います。ましてや面を被っちゃってますから周りの景色が見えませんが、ただ見えるのは鼻から覗いて下が見えるだけです。全部あなたに預けますという事ですが、お祭りの冠面者にとってもとても大切な事です。その脇で支える手引き衆というのがいまして、その方の動きにかかっています。お祭り上手くいくかいかんかその人達にかかっています。その方達は何回も松明を持って出られた方で、なおかつ自分もお面を被って出られた方。まあ超ベテラン。お祭りが始まってきますとだんだん人というのは興奮してきます。喋ってる声がだんだん大きくなってきて早口になるんですね。ワーワーワーワーとやってます。自分もそうだと思います。そんな中でこの方達は、本当にこの手引き衆の方達は本当に落ち着いてみえて、終わってから反省会をやるんですが、その時に、あの時にこうでこうでこうでって話をするとな、皆さんそれ覚えているんですね。この異常な状態の中に、火があって、ワーワーワーやって、中から半鐘を打ち鳴らすところありますが、実はトラックのホイールを叩いてるんです。ガンガン、頭がガンガンする。そういうちょっと異常な状態の中でその方達は非常に沈着冷静で対処していただい

ているので、今年のお祭りは良かったねというように事を思っておりますが、そんなふうに行われております。

あと宣伝ばかりしてきて、また最後に駄目押しの宣伝であります。鬼まつりで前回もご紹介をさせていただいたのですが、まあそのぐらい経営的には苦しいんだと思っていただければありがたいな。笑っていますが、本当は内心はどうしようかと思ってるんですけれども。鬼まつりで出す特別な料理がございます。写真を持ってくと本当はもっと格好良かったんですけども、その時は忙しくて写真を撮る間がなくて、そういう事作っておかなければいけないなと思っております。その料理を4,000円で予約販売しております。この日1日だけあります。あとご祈祷券と特別にご希望ですが屋根の付いたところでも見えるよという特別な特別観覧席も用意してございます。それから駐車券もお出します。もしごゆっくり見られたい、それからお酒は飲み放題にしてあります。そういう料理がございますので、もしご希望がありましたらうちの方に電話していただいてもいいですし、この場でも受け付けますので。はい、ありがとうございます。

そんな宣伝めいたばかりの話でお付き合いいただきまして、ありがとうございます。ここら辺りで終わらせていただきたいと思うんですが。はい、どうもありがとうございます。ご静聴ありがとうございました。